

「翼」

マ
ス
ミ

美月が鍵についた鈴を所在無くいじっている。

美月M「その日も最悪の1日だった。生まれて21年住んでいるカビ臭い四畳半で、私は朝からぐだぐだしていた」

すごい勢いでふすまが開く。

静子「美月、いつまで寝てるのっ、起きなさい
いたら起きなさい」

美月「うーん」

静子「あー、頭痛いっ。まともな就職もしないで夢ばかり見て。アンタって子は本当に」

静子がふすまをぴしやりと閉める。

美月M「母の怒鳴り声の聞こえない世界に行きたかった。でも無理。お金がない。私達の世代は好景気というものを知らないのだ。私は一生飛べないのか」

客で賑わう昼時のラーメン屋。

美月M「高校を出て芝居の専門学校を卒業した私は、会社の面接を落ちまくり、近所のラーメン屋でバイトを始めた」

店長「いらっしやいませ」

美月「いらっしやいませ」

店長「とんこつ醬油と味噌上がったよ、急いで」

美月「はい、あ、ああっ」

美月がラーメン丼を落として割る。

店長「馬鹿やろ！何やってんだっ」

美月「すみません」

店長「お客さん、すぐ作り直しますから。（小声で鋭く）バイト代から差っぴくからな」

美月「えっ」

店長「何だその顔。あ、いらっしやいませ」

首にかけた鈴を鳴らせながら美月の自転車が左右に揺れて進んで行く。

美月「10時から5時まで昼休みもないんだもん。立ちくらみもするわ。あー、お腹空いた」

携帯が鳴る。

自転車を止める美月。

美月「もしもし」

カナ「（華やかな都会のざわめきが漏れ聞える）美月！元気だった」

美月「カナ？東京から？私なら元気だよ」

カナ「そう。ねえ聞いて、私舞台のオーディションに受かったんだよ！」

美月「そうなんだ」

カナ「あの東恭一の舞台だよ！」

美月「まじ？下北演劇賞を取った？」

カナ「そうだよ！チョイ役だけど。でもすごいくない！？」

美月「良かったじゃん。おめでどう」

カナ「オーディション会場で主役の町田ヒカリともすれ違ったんだよ。良い匂いしたあ」

美月「ふうん」

カナ「来週から稽古なんだ。緊張」

美月「へえ。カナがんばってね」

カナ「がんばるよ。美月もこっちおいだよ」

美月「私は」

カナ「あんなに先生に褒められてたじゃん。

私内心憎らしかったよ」

美月「うん」

カナ「お金なら大丈夫だよ。東京って札幌と全然違う。時給高いし色んな仕事があるんだよ。やってけるって」

美月「そうなんだってね」

カナ「もう芝居やってないの？」

美月「いや、劇団に入ってる」

カナ「劇団？有名なところ？」

美月「まあね。座長もセンスあるし」

カナ「ふうん。でもやっぱこっちは来なくちゃだめだよ！」

美月「ありがと。考えとく」

美月の自転車が左右に揺れて進んで行く。

鳴る首の鈴。

美月「すごいなあ。東京の舞台か・」

美月がビルの地下の鉄階段を下りる。
カンカンカンと暗い音が響く。

美月M「上京する仲間達を見送った私が投げやりに入った地元の小さな劇団。座長も団員も良い人達だ。一緒にいると楽しい。でもそれだけだった」

重い扉をぎいと開ける。
たちまち座員達のバカ笑いが聞える。

座長「その姉ちゃん、朝寝顔見たらヒゲ生えててよお」

小春「(爆笑)もうやだあ座長」

ベン「んな事より明日の真駒内記念は」

座長「そりやお前カサイレジェンドだべ」

真剣にスポーツ新聞をがさがさ広げる座長。

美月「おはようございます(煙草の煙にむせる)ゴホゴホッ、煙草臭っ」

座長「おう美月、今日25日だからラーメン屋混んだんでないのか」

小春「ざんぎ食べな」

ベン「美月、ここ座れば。座長、本命はマオチャンスピンに決まってるっすよ」

座長「やつぱりマオちゃんか」

小春「やだ座長、おしりかかないで」

座長「かゆいも、ほれほれ」

小春「きや、よってこないで」

美月「(むせながらゴホゴホ)あ、稽古場禁煙にしませんか!もう限界」

座長「なんかお前かりかりしてんな」

美月「はあ?当たり前前の事言ってるだけです!禁煙する人増えるのも知らないんですか。いつまでも競馬の話なんかしないで、稽古しましょ」

小春「なしたの、美月」

美月「でもその前に片付けないと!」

ベン「面倒くさ」

美月「こんなんじやちゃんと稽古できないでしよ!!!」

座長「分かった、美月の言うとおりにするべ」

ベン「はあい、わ、すごい埃。これ昔舞台で使った地下鉄だ」

小春「ゴホゴホ、ホントだ。あれもくだらなかつたね。東西線と南北線の許されない愛」

ベン「絶対に会えない」

小春「二人、いや二台」

座長「南北線様、東西は今日も大通駅の上から貴方の振動感じました」

ベン「これ、座長がヨサユイの踊り子役やった時の長半てん」

座長「(くねくねと歌う)♪ソレソレソレ」

小春「座長が途中で脱ぎだして」

ベン「あれやばかったわ(爆笑)」

美月が音立てて小道具を片付けている。

美月「(ぶつぶつ)ほんと、汚い。いつまでもこんなガラクタとっておいて。煙草の灰くらい捨てなさいよ。うわっ、何このパンツ!

小道具が、がっしやんと落ちる。

小春「美月」

座長「美月。帰りに何か食いに行くか」

美月「良いです。どうせお金ないんでしょ」

小春「言い過ぎだよ美月」

美月「座長は何を指してこの劇団をやってるんですか」

座長「何を指してってもちろんブロードウェイ」

美月「(かぶせて)バカッ」

小春「ベン」えっ」

美月「座長いつもそうですよね。いい加減で」

座長「美月、どうした。母ちゃんにまた何か言われたのか。ラーメン屋で怒られたのか」

美月「違いますっ」

座長「みんな面白芝居したらまたお客さん喜んでくれるぞ」

美月「いやです!それだけじゃ」

美月「いやです!それだけじゃ」

座長「美月」

ベン「そりや美月はうまいけど」

美月「私東京に行きたいんです。東京で事務所に入りたいんです」

小春「へ？」

ベン「急にどうした」

美月「私役者の専門学校卒業した時、東京の事務所に受かってたんです。お金なくてあきらめたけど」

座長「美月・・・」

美月「私の希望がないんです、こんなところじゃ」

小春「こんな、とこ・・・？」

美月「お客さんだつて同じ人ばかり3、40人。狭くて座りにくい会場しかなくて。何年やつたつて札幌なんか芝居で食べてけるわけじゃないし」

ベン「ここ辞めるの？」

座長「・・・良いじゃないか」

ベン・小春「座長」

座長「行つてみれば良いさ、東京。お前ならやれるべ」

ベン「だつて俺達は」

小春「そうだよ。美月に抜けられたらどうなるの」

座長「残つたもんでやつてくさ。何とかなるべや。おし、今日稽古止めて飲むべ。美月の前祝いだ」

小春「座長」

ベン「もう焼酎ないよ」

座長「お客さんくれたビール券あつたべや。ここら辺になかつたか」

小春「きゃ、どさくさに紛れてさわんないで！」

座長「いいべや小春、減るもんでなし」

小春「そんなだから美月が出て行くつて」

ベン「あつ、券あつた」

座長「期限いつまでだ」

三人の騒ぎ声が小さくなる。

美月M「座長の大きな背中が遠くに見えた。

こんな所にいたのか、私は。絶対東京に行くんだ。もう迷わない」

千歳空港登場口付近のざわめき。アナウンスが次々に流れる。

「(チャイム音)・・・から出発便のご案内

内

をいたします。10時十五分発・・・」

「保安検査をお済ませの上、ご出発のお客様は八番搭乗口待合室に・・・」

美月M「それから私は必死でバイトを掛け持ちしてお金を貯め、怒る親を説き伏せて上京を決めた。華やかな新千歳空港にもしあの下品な人達がいたらどうしようと思身構えたが、誰もいなかった。もう過去とはさ

よならだ。飛ぶんだ。美月」

出発直前の機内のざわめき。

美月「27のJ、27のJ・・・」

絹子「あらここ貴方のお席？」

美月「え？いえ私通路側です」

絹子「あー良かった。年をとつたら小さい字が見えにくくて。こんなお婆ちゃんが隣で悪いわね」

美月「いいえ。あの、この紙袋、棚に上げましょうか？」

絹子「助かるわ。乗務員の方が来るのを待つていたんだけど」

美月「はい失礼します」

美月、絹子のお土産の紙袋を持ち上げ荷物の棚を閉める。

美月M「窓際に座つたグレーのスーツの女は上品で優しそうだった。ぼろぼろの大きな大学ノートを大事そうに胸に抱えていた」

CA「(機内アナウンス)この飛行機は東京国際空港羽田行きでございます。東京までの飛行時間は離陸後1時間10分を予定しています。ただ今の気温は・・・F0」

絹子「美味しそなお土産ばかりでたくさん

買ってしまつて。北海道の方が羨ましいわ」

美月「(不満) はあ」

絹子「貴方地元の方？」

美月「一応」

絹子「こんなに所に生まれてお幸せね」

美月「は？幸せ？」

CA「(機内アナウンス) 皆様大変長らくお待ちいたしました。この飛行機はまもなく離陸いたします。シートベルトを腰の低い位置でしっかりと・・・」

美月「来るわけないか」

絹子「え」

美月「いや、何でも」

千歳空港屋上。

飛行機が次々と飛び立つ。

ベン「屋上寒いっすね。風強っ」

小春「こんな所あるんだね。飛行機がたくさん」

ベン「座長会わなくて良かったんですか」

小春「せっかく千歳まで来たのに」

座長「・・・邪魔だろうさ」

小春「座長」

座長「東京か。くそ暑い街だったな」

ベン「座長、もしかして東京に？」

座長「2年だけな」

小春「あれが美月の飛行機？あ、動き出した」

ベン「ちゃんと東京着くかな」

小春「変な事言わないで」

座長「動いた、動いた。飛ぶぞ、飛ぶぞ！」

飛行機が爆音をたてて飛び立つ。

絹子「(苦しい)あの、お嬢さん」

美月「はい、具合悪いんですか？誰か呼びます？」

絹子「いえお願いがあるの。この手をぎゅつと握ってほしいの」

美月「こうですか？」

絹子「ありがとう。私は飛行機が苦手だね。(必死)何かお喋りしてくださる？お願い」

美月「はい、ええと」

美月の胸元の鈴が鳴る。

絹子「あら素敵な音。ネックレス？鍵に鈴がついてる」

美月「持ってきたちゃったんだ」

絹子「どの鍵？」

美月「それは・・・」

美月が始めて劇団の稽古場を訪れる。

座長「小林、美月」

小春「そんな固くなんなくて大丈夫だよ」

ベン「俺たちとって食わないよ」

座長「ガオー」

美月「きゃー！」

小春・ベン「座長！」

美月「あのうわたし」

座長「ベン、辞めたフランソワの鍵あったべや。首から下げるやつ」

ベン「どこだっけ？」

小春「確かそこらに、あ、あった、あった」

鈴が鳴る。

座長「これこの稽古場の鍵だから」

美月「え？」

座長「これでいつでも入れるべや」

ベン「むさ苦しいところだけど」

座長「そう、むさ苦しい、おいむさ苦しいは余計だ」

小春「うるさいよ、ほら鍵首にかけてあげる。お腹空いたらダンボールにカップ麺、あら？」

座長「ベン全部食ったな」

ベン「知らないすよ、座長じゃないすか」

座長「俺食ってね」

小春「買っとくよ。寒かったら毛布もここに」

座長とベンと小春の声小さくなっていく。

【回想終わり】

美月「これは・・・もういらぬ鍵なんです」

絹子「いらぬ鍵？」

美月「ご気分どうですか」

絹子「ありがたい。だいぶ良くなったわ。私の名前は藤田絹子」

美月「藤田、絹子さん。絹子さん」

絹子「そう呼んでくれるの、嬉しいわ。東京に帰るところよ。貴方は」

美月「はい。私は小林美月です。東京で事務所に入るんです。演じるのが好きなので」

絹子「素敵、さぞかしクラスの人気者だったでしょう」

美月「人気者？(苦笑)私の子供の頃のあだ名はマンガーでした」

絹子「可愛い。マンガー」

美月「マウンテンゴリラの略です」

絹子「(絶句)マウンテンゴリラ」

美月「私太ってたんです。だから」

絹子「まあ」

美月「中学ではお弁当も休み時間に隠れて食べてました。お昼休みだと一緒に食べる人がいないのがばれるから」

絹子「そうだったの」

美月「でも三年の文化祭で主役の子が盲腸になって、私に回ってきたんです」

絹子「それでどうなったの」

美月「緊張したけど役になりきるの、無茶苦茶楽しくて。終わったなら割れんばかりの拍手が」

絹子「すごいわ」

美月「何より、私だけクラスで『小林サン』と呼ばれてたのが文化祭の後は「美月！」

って変わって。嬉しかった」

絹子「お芝居に出会えて良かったわね」

美月「はい！あ、絹子さんは札幌にどんなご用事ですか？」

絹子「どうしても行きたい場所があつてね」

美月「行きたい場所？」

機長「操縦室よりご案内申し上げます、まもなく津軽海峡を通過いたします。情報によりますと東京国際空港の天候は雨、気温は・・・FO」

美月「北海道を出たのか・・・」

絹子「美月ちゃん、貴方なんだか」

美月「(自分に言い聞かせる)あー、楽しんだな、東京」

絹子「東京がそんなに良いの？」

美月「当たり前じゃないですか、演劇だってレベル高いし、有名な人いっぱいいるし」

絹子「有名になりたいの？」

美月「有名になりたいっていうか」

絹子「お金持ちになりたいの？」

美月「いや、そういう事じゃなくて」

絹子「札幌ではできない事なのね」

美月「できないに決まってるじゃないですか、あんな人達とじゃ」

絹子「あんな人達？」

美月「・・・私、札幌で劇団に入ってたんです。でも最低なところで」

絹子「最低？」

美月「座長は下ネタばっかり」

絹子「それは最低ね」

美月「あの、でも何でもかんでも下ネタ言ってるんじゃないかって一応考えて言ってるらしい、です」

絹子「あらそうなの」

美月「札幌の演劇賞取った事もあるんです、座長。実力がないわけじゃない」

絹子「すごいじゃない」

美月「小春さんはまず私達がお腹好いてないかばっか心配するし。でもそれより台詞早く覚えてもらった方が」

絹子「劇団の方ね」

美月「小春さんが毎回持ってくるざんぎ、しよっぱ過ぎなんだよ。あ、まずいと言って

るわけじゃ」

絹子「分かったわよ」

美月「ベンもね、ベンでベーターベンみたいな頭してるから座長がそう呼んでるんですけどね」

絹子「もじゃもじゃなのね」

美「ハツとするような芝居するんです。時々だけど。でも稽古終わるとすぐ寝転んでマホで競馬見て」

絹子「あらまあ」

美月「ちゃんとやろうよ！だからいつまでも私達は、つうかももう私関係ないけど」

絹子「劇団の皆さんが好きなのね」

美月「えっ」

絹子「とても嬉しそうに話すけど」

美月「でも最低なところで」

絹子「あんな人達とじゃ」

美月「札幌で劇団に入ってたんです。でも最低なところで」

絹子「最低？」

美月「あんな人達とじゃ」

絹子「あんな人達？」

美月「・・・私、札幌で劇団に入ってたんです。でも最低なところで」

絹子「最低？」

美月「あんな人達とじゃ」

絹子「あんな人達？」

美月「えっ」

絹子「あんな人達とじゃ」

美月「あんな人達？」

美月「そんなわけないです」
絹子「そう」

美月「それに私、あの人達ともう会う事はな
いんです。ひどい事言っただけ」

絹子「ひどい事」

美月「つい、口が滑って」

絹子「そうなの」

美月「札幌に帰るつもりもありません」

絹子「美月ちゃん」

美月「絹子さん、さつき地元で羨ましいと言
ったけど、私札幌で良い事なんて何もな
かった。これから東京でがんばります」

絹子「良い事なかったの？札幌で」

美月「そうです」

鈴が鳴る。

CA「お客様にご案内申し上げます。羽田空
港悪天候のため千歳空港に引き返します。
お客様には大変ご迷惑をおかけいたしま
すが」

ざわめく機内。

乗客A「えーっ」

乗客B「困るよ」

絹子「まあ」

美月「えっ引き返すの」

絹子「そうらしいわ」

美月「そんな。私ついてない」
絹子「美月ちゃん」

美月「ついてない、絶対ついてない。せつか
くがんばったのに。いつもそうなんだ。肝
心な時に私って!!!」

絹子「私についてるわ。戻れるなんて」

美月「え？」

絹子「美月ちゃん、このノートを見て」

ノートをめくる絹子。

美月「これ？スケッチ？大通公園？道庁、中
島公園。これ紅葉の時期ですね？うわ、
綺麗・・・」

絹子「私の亡くなった主人は絵を描くのが好
きでね。定年になってからよく札幌にスケ
ッチに来てたのよ」

美月「絹子さんも一緒に？」

絹子「彼一人よ」

美月「え」

絹子「初めてのスケッチ旅行に行く時、私を
喜ばせようと千歳行きの手ケット2枚出
してきて」

美月「はい」

絹子「でも私はその時自分の仕事で頭が一杯
で。行けるわけじゃないでしょ！って。あの時
の主人の淋しそうな眼、忘れられない」

美月「ああ」

絹子「何故あんなきつい事言ってしまったの
かしら」

美月M「大学ノートを胸に抱え直した絹子さ
んはとても寂しそうだっただけ」

絹子「あの人不器用で。まもなく煙草も吸わ
ないのに肺がんになってね。酸素マスクつ
けて喋れなくなったの。病室で私が一生懸
命話しかけてただけで、あの人は何を思
っていたのかしら。もっと二人で楽しい時
間を過ごしておけば良かった」

美月「楽しい時間？」

絹子「私の時間はもう戻らないわ」

機内で子供連れの家族の笑い声が起こる。

母親「(笑) もー、いたずらばかりしたら
ママこうしちゃうぞ」

女の子「(くすぐったくて笑う) やだやだあ
母親「(おどけて) こちよこちよこちよ」

女の子「(キャツキャ笑う) くちゅぐつたい」

母親・女の子、二人で声を揃えて笑う。

絹子「あなたは何をしてる時が一番楽しいの」

美月「それは」

【回想】

劇団員が稽古場で打ち上げをしている。

美月「すみません座長。台詞飛んでしまって」

座長「(酔ってる) 良いって、気にすんな」

美月「だってあんな大事なところで」
座長「じゃお詫びに触らせろ」

美月「きやああ」

小春「座長！美月ちゃんこっちおいで」

ベン「(酔ってる)座長次の公演何しますか」

座長「そりゃ純愛ものしかねえべや、なあ美

月、ひっひっひ」

小春「いや気持ち悪い」

ベン「ひゅーひゅー」

座長「ばかやろ、酒切れたぞ」

座長小銭を出す。

ベン「足りないすよ」

小春「どれ私も」

美月「私も出します」

みんな次々に小銭を出す。

ベン「ひいふうみい。何の酒買えるかな」

座長のいびきが聞える。

小春「やだ座長寝ちゃった」

美月「本当だ」

みんなで大爆笑。

【回想終わり】

美月「それは・・・あつ、ない！」

絹子「どうしたの」

美月「鍵がない」

絹子「え」

美月「稽古場の鍵がない」

絹子「あの鈴のついた？あれは稽古場の鍵だったの」

美月「そうです。初めて行った日に座長がく

れたんです。どこいっちゃったの」

「ないないない」と探しているうちにF

o。

CA「(機内アナウンス)飛行機はまもなく

千歳空港に向けて着陸態勢に入ります。お

急ぎのところ皆様には大変ご迷惑を・・・F

O」

新千歳空港から札幌行きJR車内。

ベン「座長、今日のレース・・・座長？」

座長「ベン、俺競馬止めるわ」

ベン「座長」

小春「美月に餞別も渡せなかったもんね。さ

て、美月そろそろ東京に着くかな」

ベン「そうだね、到着時間は。あつ！飛行機

引き返すそうですよ」

座長「引き返すって何だ、ハイジャックか」

ベン「ほらスマホに」

座長「大丈夫なんだろうな、美月」

小春「空港に戻ろうよ。困ってるかもしれない

い」

座長「降りよう」

小春「痛つ、座長、足踏まないで。まだ降り

れないよ」

CA「(機内アナウンス)飛行機はまもなく

千歳空港に着陸いたします・・・FO」

美月「ない」

絹子「美月ちゃん落ち着いて」

美月「ないよ」

絹子「美月ちゃん」

美月「どこにもないよつ」

鈴の音が近づく。

絹子「あ、ちよつと待って、鈴の音が聞える」

美月「どこ、どこ」

絹子「あそこのお嬢ちゃんが」

美月「えっ」

子供「これ、お姉ちゃんのもの？」

美月「あつ」

子供「落ちてた。そこに」

美月「ありがとう！」

絹子「良かったわね」

美月「(泣きそうになつて)ありがとう」

絹子「私ね、自分の心にもっと素直になれば

良かったと今は思うの。もう遅いけど」

美月「絹子さん！」

絹子「はい」

美月「私が一番楽しかったのは劇団の人達と

一緒にいる時です」

絹子「そうね」

美月「私の仲間です。私に居場所くれました」

絹子「そう」

美月「驚かないんですか」

絹子「言ったじゃない、劇団の話をする貴方
嬉しそうだった、って。東京の話をする時
ちっとも楽しそうじゃなかった(笑)」

美月「そうでしたか」

CA「(機内アナウンス)皆様ただ今当機
は新千歳空港に到着いたしました。本日は
お急ぎのところ・・・F O」

絹子「貴方本当はともついでる人なんじゃ

ないの、ふふ」

美月「そうでしょうか」

飛行機が爆音をたてて到着する。

乗客A「まいったな、会議に間に合わないよ」

乗客B「どうしてくれるんだよ、一体」

絹子「何か私達二人だけ嬉しそうね」

美月「絹子さん」

絹子「もう一度主人のスケッチのコースを周
ってみるわ。あのいやがるかな」

美月「絹子さん私劇団の人にごめんなさいっ
て言います。許してくれないかもしれない
けど」

絹子「はい」

美月「さよなら、絹子さんお元気で」

絹子「さようなら。いつか貴方の劇団のお芝

居見に行くわ」

美月「ぜひ。有難うございました。お世話に
なりました」

千歳空港到着口付近のざわめき。

アナウンスが次々に流れる。

「(チャイム音)到着便のご案内を申し上
げます・・・F O」

美月が歩いている。

鈴が鳴っている。

美月M「でもあんな形で辞めると言った私を

あの人は許してくれるだろうか。空港に
も来てくれなかったし。どんなに怒って
だろう。ごめんなさい。こんなところなん
てもう言わないから。お金ないくせになん
て言わないから。ないのはホントだけど、
でも言わないから。ごめんなさい座長、ご
めんなさい小春さん。ごめんなさい、ベン」

座長「美月！」

美月「座長」

ベン・小春「美月！」

座長「お前大丈夫だったのか」

美月「泣き出しそう」う、うう」

座長「大丈夫か、東京で何かあったのか」

小春「美月は東京に行っていないって」

ベン「そうだよ」

座長「美月」

美月「(しゃくり上げる)うわーん」

座長「(困惑)美月、美月って」

小春「美月」

ベン「美月」

美月「(一層しゃくりあげる)うわわーん」

座長「美月」

美月M「こうして私の短い旅は終わった。

私なんて飛べないと思ってたけど翼は

ちゃんとあったんだ」

タイトルコール 「翼」

座長「何か食って帰るか」

美月「良いです、どうせお金ないんでしょ、

あつ言っちゃった」

小春「美月！」

座長「ゆんべバイトの金入ってよ」

ベン「俺に預けたら競馬で倍に」

小春「ベン！」

美月「これから稽古をもっと」

座長「なしてお前はそつたらに固いかな」

四人の笑い声、話し声がF Oしていく。

美月M「私は、私の翼を広げて思いきり飛ぶ

んだ。この空を自由に、高く、どこまでも。

だって私は一人じゃないから恐れずに飛

べるんだ」

(了)